

【短 報】 野生動物

ナックリングを呈した国の天然記念物マガン (*Anser albifrons*) の
救護事例

大杉 祐生¹⁾ 岡田 東彦¹⁾ 華園 究¹⁾ 牛山 克巳²⁾
山田 智子³⁾ 齊藤さゆり⁴⁾ 浅川 満彦¹⁾

- 1) 酪農学園大学獣医学群 獣医学類 (〒069-8501 江別市文京台緑町582)
2) 宮島沼水鳥・湿原センター (〒072-0057 美唄市西美唄町大曲)
3) ウトナイ湖野生鳥獣保護センター (〒059-1365 苫小牧市字植苗156番地26)
4) 北海道空知総合振興局環境生活課 (〒068-8558 岩見沢市8条西5丁目)

要 約

2021年10月、宮島沼で左脚から趾にかけた部分にナックリング症状を呈した国の天然記念物マガン (*Anser albifrons*) 幼鳥が救護され、酪農学園大学野生動物医学センターに搬入された。体幹背部裂傷に加え、左趾裏が正常に接地できなかつたため、X線画像診断を行ったところ、同部で脱臼と炎症像が認められた。越冬地への飛翔が不可能であった場合を鑑み、冬期でも結水しない河川、およびその流入部のあるウトナイ湖であれば、毎年越冬が確認されているハクチョウ類と同様に生息が可能と考え、同湖に放鳥された。

キーワード：X線画像、救護、国の天然記念物、左趾部脱臼、マガン

北獣会誌 66, 105~107 (2022)

マガン (*Anser albifrons*) は環境省レッドリストにおいて準絶滅危惧種、文化財保護法により国の天然記念物に指定されている。この鳥種の多くは、2002年にラムサール条約湿地として登録された宮島沼を渡りの中継地点としている。2021年10月9日に宮島沼水鳥・湿原センターに地域住民から、美唄市圃場内で衰弱したマガン幼鳥1羽が確認されたとの通報があり、同センター職員がこの個体を緊急収容した。酪農学園大学 (本学) からの要請により、北海道空知総合振興局職員が気管スワブ・総排泄腔スワブを材料に、インフルエンザ簡易検査キット (エスプラインA インフルエンザ: 富士レビオ、東京) を用いて検査をしたところ、陰性であった。以上から、バイオリスクは低いと判断され、17日に本学野生動物医学センター (WAMC) に搬入された (図1)。

な本種体重 (1,815~2,721 g)^[1]より軽かった。外貌検査から、この個体の体幹背部皮膚に軽度の裂傷が認めら



図1. マガン搬入時

外貌検査

WAMC収容時にこの個体に登録番号 AS18646を付与後、体重測定が実施された。同個体は1,800 gで文献的

連絡責任者：浅川 満彦 酪農学園大学獣医学群 獣医学類

〒069-8501 江別市文京台緑町582

TEL 011-388-4758 FAX 011-387-5890 E-mail: askam@rakuno.ac.jp

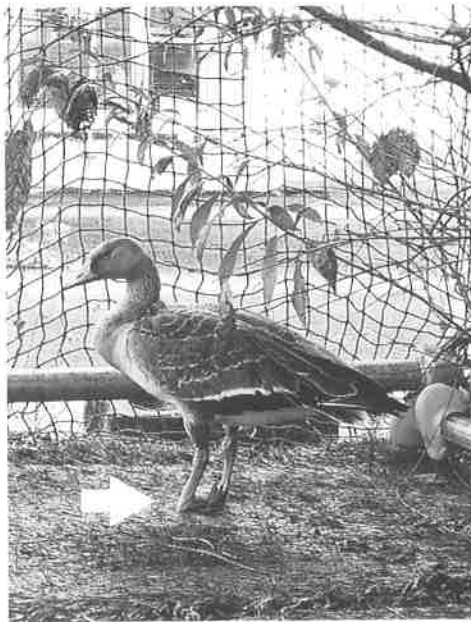


図2. WAMCケージ内の様子
左趾の向きが90°時計回りに変位している(白矢印)

れたほか、左趾がナックリングを呈した(図2)。加えて、体表上に少なくとも2種のハジラミ類の濃厚寄生が認められたが、本個体の羽毛に深刻な影響は与えてはなかった。ハジラミ類の報告については、衛生動物学的に貴重な記録なので、別に公表^[2]の予定である。また、飛翔は不可能であったが、概して元気であり、食欲も旺盛であった。そこで、WAMC屋外ケージに水場と雨風を防ぐ板を設置し(図2)、餌の糶をほぼ自由採食できるようにした。ストレスを考慮して、マガンへ直接触れる処置は1日1回とした。

画像診断

特に、左脚から趾にかけての部分のナックリングが著しかったことから、WAMCへの収容から3日後、WAMC入院室にて移動式X線撮影装置(OLEX P7:長田電機工業、東京)およびデジタル画像診断システム(CALNEO Smart C12:富士フィルムメディカル、東京)を用い脚部の検査をした。その結果、左後肢の跗蹠骨以下において明らかな骨折は認められなかったこと、第2趾近位と中位趾骨間関節で脱臼が認められたこと、第4趾左側の趾骨周囲と跗蹠と趾の関節部周囲の掌側に軟部組織の腫脹が確認され、炎症あるいは損傷の可能性が疑われた(図3)。また、ナックリングを呈していることから、趾骨脱臼のみならず、長趾伸筋などの趾の伸筋の損傷や腓骨神経などの末梢神経の損傷も考えられた。そこで、脱臼については整復を試みた後、患部の廃用性萎縮の進行を妨げる意味から可及的速やかに放鳥することにした。

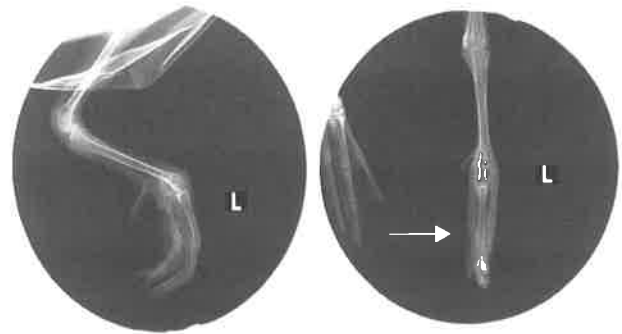


図3. 左脚部側面(左)および背側(右、矢印は脱臼部位)のX線画像

放鳥

最悪、飛翔できない場合には越冬することにもなる放鳥場所は、結氷しない湖沼であることが最低条件である。また、輸送時のストレスも鑑みないとならない。さらに、マガンが生息する前例が必要である。以上すべての条件を満たすのは、苫小牧市にあるウトナイ湖である。この湖は周囲9 km、面積275 ha、平均水深60 cm、3つの河川(勇払川、オタルマップ川、美々川)が流入する淡水湖で、それぞれの河川部および2つの河川(勇払川、美々川)流入部は、冬期でも結氷しない。また、ラムサール条約湿地でもあり、マガンを含むガン・カモ類の重要な中継地点である。そこで、同年同月23日に、ウトナイ湖野生鳥獣保護センターに搬入され、放鳥された。本報告を作成している2021年12月中旬現在、放鳥個体を含むマガンは同湖の無結氷地点では確認できなかった。

今後に向けて

今回、脚のみX線画像診断を行ったが、飛翔不可能であったことを考えると、翼から体幹部のX線画像も撮影すべきであった。野外において、片脚のない野鳥は、時折見かけるが、飛翔可能かどうかはより重要な生存するための要素である。この反省点は次回に生かしたい。

また、救護現場における感染症対策は非常に重要である。マガンは高病原性鳥インフルエンザウイルス(H5亜型)に感受性が高く、死亡野鳥等の調査で検出しやすいと考えられる鳥種とされている^[3]。加えて、宮島沼のマガンでは強毒型マレック病ウイルスによる病変が検出された事例もある^[4]。今回、WAMC搬入にあたり、事前に簡易検査キットによる鳥インフルエンザの陰性の確認を行い、収容した段ボール(図1)の焼却や清掃など感染症対策は入念に行った。

渡りの時期にカモ類を動物診療施設に受け入れること

については、たとえ国の天然記念物に指定された鳥種であっても、より慎重に行うべきであると再確認された症例となった。しかし、マガン含むガン類の個体数は近年増加傾向にあり^[5]、今回のような緊急の救護事例がまれなことではなくなるであろう。適切な対応が実施できるような仕組みを用意しておくべきであろう。

謝 辞

X線撮影にご協力頂いたいただいた本学附属動物医療センター診療放射線技師の赤羽克美様に感謝する。

引用文献

- [1] ウォルベラン E (黒沢信道、黒沢優子 訳) : 水鳥のための油汚染救護マニュアル、112、北海道大学図書刊行会、札幌 (1998)
- [2] 岡田東彦、大杉祐生、浅川満彦 : 北海道で傷病救護された国の天然記念物マガンより見出されたハジラミ類2種、青森自然誌研究、27、印刷中 (2022)
- [3] 環境省自然環境局 : 野鳥における高病原性鳥インフルエンザに係る対応技術マニュアル、5-7、環境省、東京 (2021)
- [4] Asakawa M, Nakade T, Murata S, Ohashi K, Osa Y, Taniyama H: Recent viral diseases of Japanese anatid with a fatal case of Marek's disease in an endangered species, white-fronted goose (*Anser albifrons*). In: (Hambrick, J. and Gammon, L. T. Eds.), Ducks: Habitat, Behavior and Diseases, 37-48, Nova Science Publishers, USA : (2013)
- [5] 呉地正行、須川 恒 (編) : シジュウカラガン物語ーしあわせを運ぶ渡り鳥、日本の空にふたたび、303、京都通信社、京都 (2021)